源氏秘

帚木

紙とりて巻の名こそ源氏十六帖中将とやいはん
宗祇云此巻を帚木と号(カウ)するは源氏乃君中河のやどり(方)にて
なびくてやどりし空蝉のつれなくて遁(ニ)そやどりし
ぬるに帚木のごときそのこゝろ(ハラ)ざしつゝれなき
ものにたとへたる名乃ことにあるみをあしでなど
みるにそのこゝろ(ヲ)しらひ(ヲ)かたき君ごとにうき
ものやぬるやぬるやと(ヲ)かぜうき帚木のごとくに
とれども也帚木とは美濃信濃奥國乃境(サカヒ)より其原(ソノハラ)ぬをやとこ
ある木也ちかくてとれいに帚とてそこれをみ
よ帚ごとまりあり(ル)紙(シ)にあらねどもかくいふ乃
此巻乃名なれば也(ナリ)ぬ十四帖よをよゞと名(ナ)へゝ
ハ帚ごとくなれども又昔あるべき事ともを
ねりつゞけてをり(ル)されば十四帖も悪(ヲ)くあるべきにこれ

なくおもふことをそれにあつめたるなれば此帚木一部の名よりなる物也天台四門(ダイモン)の中四教(シキョウ)は非有非空(ヒウヒクウ)亦有亦空(ヤクウヤクク)門(モン)此物語(モノガタリ)の序(ジョ)細流(サイリウ)曰桐壺(キリツボ)の巻(マキ)は序分(ジョブン)なるべし此帚木の巻も入(イ)るべし此帚木の巻の序分(ジョブン)なるべし元荘子(ゲンサウジ)が胡蝶(コテウ)の夢(ユメ)の詞(コトバ)も此巻(マキ)の序(ジョ)なるべし世間の当(アタ)れるとも当(アタ)らぬとも帚木(ハヽキヾ)より始(ハジメ)て爰(ココ)彼(カシコ)を評判(ヒヤウバン)するなり也云帚木と云名(ナ)は此巻の大意(タイイ)より相(アヒ)応(オウ)せり意(ココロ)あり云(イフ)の理(リ)肝要(カンヨウ)也爰(ココ)彼(カシコ)を評判(ヒヤウバン)もあれば(アレバ)こそ人間(ニンゲン)の事(コト)を写(ウツ)すこそ(コソ)物語(モノガタリ)の理(リ)なれ(アレ)

一部(イチブ)よりうるおひ(潤)ある(有)

ひろき源氏(ゲンジ)なれば帚木(ハヽキヾ)一部(イチブ)の名(ナ)よりなるべし(帚木(ハヽキヾ)の巻(マキ)の名(ナ)は)

とぐ世(ヨ)をうるおす(潤)ごとくもとをし(遠)

恋(コヒ)の世(ヨ)をもうるおす(潤)ごとくもとをし(遠)

つゝけん人(ヒト)のおやひさごよさういいこと(実目作くるし)

くる氏(うじ)づくし(七五やくうた)

かゝる風流(フウリウ)なる(有)

れもひさん(久)しく中将(チウジヤウ)などみりのこと(久)

ろ(呂)よのこと(事)ひろう(広)

活(イカ)し時(トキ)いさ(葵上の巻)

そ(曾)れやこ(古)そ(曾)

源氏(ゲンジ)なのことくく

河海(カカイ)よ名(ナ)のことくく(悉)く(く)抜(ヌキ)書(カキ)すべきよりもあらず(ず)概(ガイ)をうるもあるべし(し)

紫式部(ムラサキシキブ)名(ナ)のことくく(悉)く(く)光源氏(ヒカルゲンジ)よ名(ナ)ハいうもさらなり

花鳥(クワテウ)山(サン)藪(ソウ)帯(タイ)の前(マヘ)ハ桐壺(キリツボ)巻の終(オヘ)の詞(コトバ)よりの君(キミ)よ名(ナ)にあらずとのみそ(曾)

て後(ノチ)そ(曾)うとも(共)ゆるすと(と)ハ(ハ)

ひかる(光)源氏(ゲンジ)なのことくく(悉)く(く)

孤(コ)独(ドク)世(ヨ)よそ(曾)名(ナ)をくち(朽)ぬの誉(ホマ)れハ

細(コマ)人(カタビト)とそ(曾)なるかりの(の)ふし(節)世(ヨ)

間(ケン)のありさま(様)

をそ(曾)ごと 河逸(カハツラ)日本紀(ニホンギ)数奇(スキ)良襄(ラジヤウ)

ごのびさひく

暁源氏(ゲンジ)の君(キミ)の好色(カウシキ)ハ在中将(ザイチウジヤウ)なごめ

くるしひよ八帚(ハヽキヾ)りて上(カミ)ハ實(ジツ)と当(アタ)

て下(シモ)よいをそごのく

人(ヒト)のおやひ 孟子(モウシ)も行(ヤウ)もて

人(ヒト)世(ヨ)孔人(コウジン)のおやひさごみてこそ世(ヨ)

なくしひよ 孟(モウ)ひのまゝそし

令一 河 朧 んやうしつよくしてさて みえぬ心え
このかみ 細 物語の名は清少納言の枕双子にもみえたり 抄注 光君下の人は好色がって上に実を立る行よりしるひ
うちのそしりを好色の意よわくて交野の少将はなひんと紫式部がいひて書く作り物語の人ぞといひ
物語の人を対するに面白くかきなしてまで此一巻の序也
まだ中将などにものし 細 このより以後の紙か今源氏は宮中将より光ひし 此文字は道の
文字なくは御物いみさしつゞきてもむかしの物語なくのくらて書のなり
それいるのよべく 細 相重のも内ずくのこのまゝしてまで六日まではまでさかいのき
二三日などもしくまくまへとあり
あぶのみだれやと 内裏にくいらうされたとおもひんと葵上よりはさひらへたり
奥入 是日所のみ露のまり衣のみのされたるうきこれを
さしもあだめき 祇 かりに人の縁ひきひしうども光君のけしよ心をあかすもの人にしとあかてす
なまめかしき(?)年代はよりさもかりなりとの義之 細 此段は悉皆源氏の君の本性を書あらはし
ゆく源氏の君のみなせかくるをしりつきしよろしくなるさらとことあるとく
うちつけのさまくしされとは そわかろよ好色なるすゞろなの事はみのとあるねとく
わなれ性 それつきろ茜とらえ
あやにく 孟 わりなきさんえ
さるまじき 祇 私よかひきうる人ぞんにも面白く
みわたとにけりきうらみそわる每
しき振舞とあり名の立ず
ものなるべし 師説空揉み
どのいよの物に宮てきろ人を
かるらにてひきかへるをきこ
内のはおかれ 祇 禁中の御物

すきずきしさなどはこのましからぬ御本性にて。
まれにはあながちにひきたがへ心づくしなるこ
とを御心におぼしとゞむるくせなんあやにくに
てさるまじき御ふるまひもうちまじりける。
ながあめはれまなきころ内の御ものいみさしつゞきて

そしかうむかしとより八代の物忌に
しつらはせしかし御物忌とて
字をかきて簾などに付てあ
そばにすまさせむ
るよし 孟 物忌は神鬼の名也とい
この名は内によむ
河 伐軌曰迦毗羅衛國中有桃林其下有一大鬼王号物忌其鬼王遏他鬼神不寄髪大鬼神王誓願利益六趣有情實吾名号者若人宅物恠屢現悪夢頻示可攘諸凶害之時臨其日書吾名立門其故他鬼神不令来入但書時讀呪書之時尋得於張陽靈験之師書吾名令持人如影可守護 抄要
この君も もとよりすまんとゞく
へし 源氏の葵上よりさまね
こく此中将も四の君をたまひ
かねし
うちみくも 此中将の又右大臣
の御方とりあふたり

いとゞながゐさぶらひ給ふを大殿にはおぼつかなく 祇 内にさしかゝりきえ
うらめしくおぼしたれどよろづの御 祇 源氏の御装束などもやるとも大臣方からはんよりれ方也
よそひなにくれとめづらしきさまにてうじ 調之
いでつゝ御むすこの君たちたゞこの御とのゐ 右大臣の御子とも也 源氏のとのゐどころ
所の宮づかへをつとめ給ふ。宮ばらの中将は 此中将の母は桐壺の帝の御妹 と三宮の御腹之也 源氏のいとこ也 此中将はそれにてまさる
なかにしたしくなれきこえ給ひてあそびたはぶ
れをも人よりは心やすくなれなれしく 四の君にあはせてそのつゞき 桐壺の巻にあり
ふるまひたり。右の大臣のいたはりかしづき
給ふすみかはこの君もいとものうくして 此中将も又
すきがましきあだ人なり。里にても我方の 料理極仙窟 義朧なりとみえし
しつらひまばゆくして君のお入し給ふ 源氏
うちつれきこえ給ひつゝよるひるがくもんをも 方くとまさにおそき

びとをもとうこ（細）泊の字ハ泊定の心ニて
いづくみくもものそれゆえてまほどろ
づくうこともの長き礼式ともろ
りふこともくこゆるりもとそ
ろくくみうそてそれゆえ
るしひの色よ（花御又願ふ）
ろふそこ人どくるよ
ゆくのみでもれいいのでやろ
うにおどくてよみでもなどこ
（御厨子）
ろくくのくみそ
（細そい紙之ごとく）
ろふそこひさのでく中将わりるくゆう
（源氏物中将よみてもいふくさをいふ）頑片輪
しれぐりめべくさもそいふんくこと
べさもこそ（源氏物中将）

とるくる（細）ニ大ニこのい中ねるこの我
ヲのようとおうて人ぐ
となり
とのごとく 河 各競（ヲカベ）日本紀
或各自忍引 秋凡のごも山
りとのごで吹てちる
ねるるーも 師説女の代
ちにくむれくのくみ多
ちくのくてそかくれ
とそもくくい曲ヒ（根ヲ）
えんとれい 師説此次ニ源氏の巻
彼数ともとそもふるれ
ろくさをろうにやくふこ
もてくそんをつめをくる
心地ろうのろひくく
んくくりの（厨子ヨロヅテ以中ね
よくせう数ニのうとをも紙
の比よろくし
（そい二のまちれんやくく
（細第二ニよろくまそいろまち
ろくくてこのくそろくくこと
とうて そくりの数
をかやおのえるて
ふこそみそれかれう 数ニくく

けてそくうれひてゆく
（細）それそくうくれ
ヲのかくようそこひてく
（細）ろくくのくこ
ものごとくうくくてもみ作りん
んくき書なごの（紙の比）
もべやむごくれ
（細）ろくくのくせちよろくく
ろうよ（大切ニヨリテ秘蔵ニまごろをろく）
らをさらくうくりそ
しべくれ二（ハニヘ次ノ町）
なるべくくもあこそくくり限
なるべくくれがそい二のまちのくやをそさ
（細）のくてこそろくぬろくく（源氏物）
なるものごともそねをれとそくふわそよ
それうのをとろ

ろうしなされハ中将の君のよろこびに媒の空言にへたゝれなうしるすわとく源氏ゑろうりあつられバいかうくひるすしり知らへおれゐべし

さかりなんおうかうへハをこしらおわつ人にて媒も沙ろひ秘もそうなれちかくしめさゐうよ一向上下からん人うりハ俗ろ人をうちれたるんとく

とうくさす〻

細 かりく下品と知りく上品と数ちくるきとえさうおうて中の品ハ人のん〻ハえゆへきとえ人のちよふく

孟 是より上中下の三品と分てことわうれく中にまづ

種姓 うるさ上の品の人をいふく

をつくろひてまねびいだすにそれしかあらじとそらにいかゞはおしはかりおもひくたさむまことかとみもてゆくにみおとりせぬやうはなくなんあるべきとうめきたるけしきもはづかしげなれバいとなべてはあらねど我もおぼしあはすることやあらんうちほゝゑみてそのかたかどもなき人はあらんやとのたまへバいとさばかりならんあたりにハ誰かハすかされよりはべらむとるかたなく口惜しききはと優なりとおぼゆばかりすぐれたるとはかずひとしくこそ侍らめ人のしなたかくむまれぬれば人にもてかしづかれてかくるゝことおほくじねんにそのけはひこよな

みゝたゝずかし

耳にもたゝねばとりあはれずとかく思はれたるとんやうなるべしとの心

くらゐみじかく

河 選叙令にもしくるのうちかきといふは卑の字を書より位のみじかきとえ

なほ人の上達部まで

細 諸大夫なとの時をゆて次第に昇進して公卿まで成りのぼりたる人也

けぢめ 孟 結目 掲目

師 物のさかひをいふ

此のるの以後武家の言此同前の言葉ハ此家人まいひがり此家人系圖さまともなし

かるべし中のしなになん人の心々おのがじゝのたてたるおもむきもみえてわかるべきことかた〴〵おほかるべきしものきざみといふきはになればことにみゝたゝずかしとていとくまなげなるけしきなるもゆかしくてそのしな〴〵やいかにいづれを三のしなにおきてかわくべきもとのしなたかくむまれながら身はしづみくらゐみじかくて人げなき又なほ人のかむだちめなどまでなりのぼりぬるわれがほにて家のうちをかざり人におとらじとおもへるそのけぢめをばいかゞわくべきとゝひ給ふほどに左のむまのかみ

世のをさまりの　両世の好き人
まくらことばん、
両村の人のくとうゆ
なり
なりのかれとも　細　なる枝の
ように　あの二の君と伴をる
惟光うじとも友内侍のすけ
なりよあるれり
まことにいやんごとなき
細　きは種姓　一きは人のそと
ろくゆきとまろく未摘よあ
れり
かくこそありて　我が祝
ひうつくしげのかみうら
らかまでうれいをもわさ
もまふくなんく
とうろくまでとりて
なる枝さ海くよりひとと
りて彼二枝とされ中の
君とりつく
ぬきやくりて　孟受領
と、諸国の守をいふ　國衙庄園のつとをとり初めたり

細　宮のまへ一但四ケ年てよ
てうりくさて人の出るま
というくて吏務をつとめ
かくへ　宮の内ゆく泰俊の
兼家とそへ権ちく
うちうちくりて　師祝　受領よ
君雲相すてうちのかりし惟光
の女の経充の後あて受領を
とうへ　呼名入方の女の所
時中の君ふく　擬女へ
きぬの君らひぞとおれう
の中なかとてへ　但孟
津太の諸郡よ此かひくは両時受
領の女ます独り処行き中とおう
ろれは受領とうひてとこうもあ
くの別性きうくうて　肥泰俊
今両くの上達部　師祝　名うりの
あるよりも中の君の数のさ海く
あるもを決ほよひうく
此泰俊の四位を八ケ人泰俊は六
下の段をまうりろうくこ
てなく宰相とうり泰俊は
まくうへ四位のさへいた左の

人のくなれ
ようまうくうくうくまうり
家とうこひ
うくびとの
よ月をとりくる
なりや歌
なりめくまう
そうづろ
くみひ出うもあゆくべ
いづくとうてひけぬさいとうづく

細みくいみそぎするそのあひだ
るとそよ對してそうぞふ
いえもでいりみてハおかつてる
さに於てのうんとをれどそ
うく物をくふまく出てもあ
で遣まうのるへひてやをそ
もう称こ文のかのうれふき
やうかうともえやとおふやま
こう申よるのめかるう此
細古版をむ此ふりぞりこう
ぞくとをもひろ 俗語 おまあ
くと難とひてこふいうろ
このこをりして変をそ
ぶそこそう次のまあくれ
もちをそくこうふりひこ
つまうちをけくう返えびうを
してまのるてう人とひさ
てこえをうもうもはもれと
そうぞもの不及といまそ中
ろとうりむるるく
みいさこうろ 細 髪の髪と
再にくそひこうくろうをあ
るまようせて紙为をおく
ひさこうるさ 細 貧相なるケり

ここのまハ添字ケくし古歌
御よみわるさ
くてこんんの ひなこうろ
こうりとくてるうのもも
とまそうねね男尺嘆息をろ心へ
そうりとあうせしや 清りあ
いせいうくこあんねそと思ひ
ねわやのもしくうくしく
血 古歌のこまつさてくう
よりるく 暁月
出ろうひもせれ 我口出
くうふねるでとの業それが
るでやひて今ろひもるる
あろなり
あられもうひりこうろに
我妻我为が我为るハ年で述
懐もろるあるねひ〳〵さや
に男尺ねりん付ハ女のんもへ
まいあじとほくや入て男
とも留めそでもさるる
れどそんをるくてそいふう
そであひくくひろいろ
ろうぐさこ
さでひろろよこめそそ

ひさこあらんの 細 ようろうひくこ
我第一の難しるる
とうでめのなん をべ〳〵ごとうやよるれめ
晴 るどうろねへ
なるもうでさ 男をうろひくこ
ひとのでろうみろこいりのわ
もろうろ 先紀家月雪をのねてこ
ろうるまうでのなうさ
くてもうでのなうさ
ある地 もそくめろこなくてしもう
くそでんとそいうこ
しとみくうろ
ようをれうをそ
てみもうろ 也 ねてこ
細 古歌こあ
のひとくようろ
あき出 細 男の出
て朝夕の出つ
人の好松の待ちくこ
しのんろ
をうこもひ
外人文集 そ
とうさんろ

いらくひこ 我妻とそのこ 祖父松のかう耳あとをかうをかきりこうろ
うむひとのうさわさりひろう
ろうもいでやとうこ
まいはうこ
れおうこ
やけてこぐ
なごぬかうろ
らもそむこれ
そひれてん
表ともうろ
暗あくこひてう
あうろよう
うぬごひ
のうひ
うみぐん
をへうへ
雨あうろ

祇これ天性心ぞのうつくしきをもちいるのみ
なりいかでかくもあるべきと
よく一段とうち思ひ
もちてられていは孟母三遷
人もまたその祖先をもあがめ
きことをおもてられてひやくせ
のこころねをのあんかみは
ろべきことく祖かいを
いとねんごろにあるいは
うぬとうけてそのり
をとるべしん の貪痴
をとるべしの段ふかくを
して云私の人のこころひひ
をうすりはきのりげきを
がれんべしとく
ほしいものそばくもく
細平生心を邪念のうちも
うたになり新しむうもう
うれともれ妄にまよけく
なりなんもうろのあるこ
まこかうねて らうこまで

男二而女の祖いはそもらう祖いは巨
へきことく 男と女とをうまれつく
うまれてい孟母三遷
人もまたその祖先をもあがめ
きことをおもてられてひやくせ
のこころねをのあんかみは
ろべきことく祖かいを
いとねんごろにあるいは
うぬとうけてそのり
をとるべしん の貪痴
をとるべしの段ふかくを
して云私の人のこころひひ
をうすりはきのりげきを
がれんべしとく
ほしいものそばくもく
細平生心を邪念のうちも
うたになり新しむうもう
うれともれ妄にまよけく
なりなんもうろのあるこ
まこかうねて らうこまで

花数里の影し
女の祖と云ふうるさき
おこれ若よ云ふんきくこと有ると
阿含曲 云限なも
ふ

花人心ハ云ふんむけうとをうく
三界唯心万法唯識の心く源氏一部の肝心もて
あるのゆへん 呼同
故ハ
種姓をあやめ由とハせあり
うぬ祇なうまうぐあるう
へきぬ心せいそかなるへし
師説ハ徒や貴やうよもつる
ふかをなより心ハ故由をそあ
まりとうへく貴やうよ縁
なり上よ故由をそ心ぜもう
うそひてあらば我の慈悲ぜ
しかれ雑あんいろそいそ
じとのうへん

うくこいへきをも
細 置恋友其人と云ハ
うへいつれるくこかつり
孟蓬 素祇ハ心をうさにそ
おあへうんいつとハかれ
かりうとよみぎうあうへき
まかいもいとつりへきぞ
花をかつうとハそぐぞや
なり心しねの操をふと雪霜を

終へ
つるのまれ
ゆへうんふ
よ母ひとうれうこあんをも
あるそ祇そ
あるへうよりはへじうやく
のどけき
いものづへ
うへいつれるくこかつり
孟艶 素祇ハ心をうさにそ
おあへうんいつとハかれ
かりうとよみぎうあうへき
まかいもいとつりへきぞ
花をかつうとハそぐぞや
なり心しねの操をふと雪霜を

これを法説と云。次に喩説一周ハ譬喩品也。此品にいたりてハ法説の速成授記あり。これまでも舎

利弗一人に對しての説法也。其次の段に三車一門のたとへをもつて三乗ハ一乗に帰するを

もむきをのべて、中根の聲聞須菩提・迦旃延・迦葉・目連のさとりをえせしむ。信解品・薬草喩品まで

を喩説の速成授記也。次に因縁説一周ハ化城喩品也。過去久遠劫に大通智勝佛と云如来の法

華をときたまひしをきゝし人をとりて、小乗を修行せしが、今又釈尊の説法を

きゝて回心向大の声聞もしれずの因縁をとき、下根の千二百人に次第に授記し給ふの法理を悉に

とくにかゝる人をうけておもひやるこの因縁とくにかくて三周のとくいまの物語の作者にほ

ならひたるにや。世俗文字の業、狂言綺語の誤をあらためて、諸仏乗の因、轉法輪の縁となせるべく

下﨟の羽ぶりの師の世の[illegible]ものかたりのよし[illegible]いつはりとしりてまかりなるもや

まへたてあれやかの そけしほのうしきてのやりたる具のむしもしうら法式もあるべき歟

そびつき 河 側付

ぶれをを 細 ぶれハたゞのくろてれ也、此さき人をなさしか人に蔵せすと好むへく 紙 木の名

のきらざれ實するぬ物をハ文つく人にゆるされて 細 人の物まにするべき人ハぶれゆくなるまでもろくうそそ[illegible]

まつりしてまことにかうつきし人の 紙 うるさくの[illegible]ぞうとハ人の家あるしとゆへきうさ女

のとまりさしゆくさ 孟同

奈ころ 忝くし あし

河 西宮抄ニ云ク書所在ニ武・乾ニ

細 内・京職・御書所南ニ有リ別

當五位蔵人預之云云

下にハそのうちのめてなくし

なんおもまことのものみてしどすそさぐろくして

細 そのつ紙とそふ

よをしかれ給。又云、前にぶすぬほりけれとどす 墨緑之

粉色ハ[illegible]墨縁よりも[illegible] 細 上手すなり

ぐさまえうれとくつかくまさくもふさとより

[illegible]をへ人なり[illegible] 色を見ハ[illegible]とへ助緒也

まさらけぢめふうしもみてわう袴す。

ゆうらいの山おくうそれいかれる

細 後漢書張衡傳ニ曰ク、至ヲ以ヤ

悪ム圖ヲ、犬馬ヲ而好ムヲ作ル鬼魅ヲ。誠ニ

以テ實事ハ難ク形シ、而虚偽ハ不ル窮ラ

也と云ハ、この色

れどもひとのまだぞしらぬ儀らいの山おく 見及

海のいかれるいきのすがたくしらざのさげしら

きあさりのくろうちもめまゝそねをまぼるい

かどれも物もてうつてすたりの手合を 聲あらき 又おそろしき

まいぞくひとさきハ人のめを驚かろうして 十二七

おちよハおぞうしめどもさかあらはれぐしよの 細 まことにハ似るすぐなれども

つゐの山のうたすまひらのおきれめまちる さりの鬼 さけしことを云て

き人の取おきてさ歩けるぞそのうつまし 声ぐさもからつくと云事もし

くやうしびするとな後ぞげるまゝに画 イ 南昌く

ぜんぞようするぬ山の氣色も本のふくよ 蟠翅をみなとる

ばるれうるそのしけのうすもろ前をまちれ 世とそれまかて 氣近也 細 家裁とそく

そのうろさひ[illegible]をそうなどうぞうん上手へ 河 心知ところつひく

よりこの山のかくまこのまでの

絵 大をすさ[illegible] もかきたる人 細 云ハ

とあうさせ[illegible]さのさうえも 細 人の[illegible]

人のまゝさらへきの人の画く

そうのうらねの山の

河 健 音家後集

五 是畳 哶 墨の濃淡とも

まあくせぐすれてらうそあ

てなぞ近の山をあわりさく

花鳥 雅 兼併記ヲ

金岡 ｢公望｣ 深江 ｢廣高｣

｢公忠｣ 以上五人、共上手也

金岡 以テ墨ヲ畳山ヲ十五重、廣高

五重也

浩よハ世代の学ふの山物常よの
をろやく隆よ延喜四年十一月
廿三日内裏雪着深殿云々
ハや後よりうつうつもれる
夜とふるハけの面影とも

そろそろ いくし
秋ふよはそを別れもしろ
やうのうつ 西日差陽心の
袋をく満心句くて仮も
うつけろろれの神く

火のうよふしけ
耿々残燈背壁影 白氏文集
うよろうあとも
也考ふうけうくを
衣ともり

にひくそ
なりなど
そぐりあ
ぬ
まとあり
ものやいろぐう
仍れでぎすず
まとわうべう
細ろ及ふ 就成よろう
ましみはうう
ぼろうまだ
れまりあり

まとありてあひそうを
久ふないとふくそて
ろう向きよけくろふし宇
のふいとおりて変ろ中
のくそうとそれいそのそ
うそ後くうひとそ彼
を物語よ十とひつてりい
つよりのてかとふくそ
細化り物伏れい上のりり
のとあうくをいりやとと
今をひりそてうとそ

うれのまりてでくく
元亨 賀茂臨時祭調楽十一月
午日於北陣掃假屋有儀式
有饗饌勧盃等 就之
のまりとうまりのくく
十一月酉也調ふハ午の日く
大内うくあるくく多
の所代のまよ式多り。給ハ物

ちくひめといへるも
細 うるはしき女の袖をよく染る
ことを錦田姫とも云織女をも
七夕のそらにもたとへたるもの也
後撰 見るごとに秋にもなるか立
田姫紅葉そめむと山もきるらん
花鳥に後漢の董永といふもの天織
女妻となりて一月に縑三百匹
をりしよしといへり
そのさまいつくしのちわたるを
紙 裁のふくろハ似をとりも長き契
アたるゝせさまといへるハ
七夕津女にひとしとてたちのふる
ハあへぞことのをるとて送
その立田ひめに綿に八丈をよくおろし
細 る故ハ書れ物のきぬひるとよく
させのうハ文をいひあらはし
とわめるとそ
そのうち花紅染ぬしいふも
師説 色ハ立田姫の錦にハ文
よく袖あらしとの女の袖よく染
しろの大切なるゆへひしとさ
わてなる類ハ花紅染ハそるを
き袖しるもそれさえおなり

師説 彼ひさしかたき家とにして拾え八ひらて三枚の中
みんなま人へ出しるくるゝきわぐこともやうもきく
と清谷せざるもし載てあかしさうて
よのなかをもいひあらせさるよりいふんけ
甲斐の国へ行さいハわるまい
ひかりしとも
しんさびめとしいへもふうつゝさみうしらぞこれ
袖を染櫛のやうにも作りたてゝ
たらこの手みもどうまじくぞのかゝでて
紙細 うつりゆくこそ物の初也
うらくもん給しとて衣とさひ出なり。
ちらしともそれのなかの空
師説 中将のなんの始めを出ても女の子が恥かしうとおもふ恥て云給也
中ねそのさみがこれちらめてことのびらく。
松の末に霜かゝりて
あくさらぶりみぞびえましげよそのあふさ
彼女に比
しきそ
昨のかしこさゆへやさくゆのあくじきすさ
師説 絹と染る
よ対して花紅染をとるまさにかとく
花はみららとしふもおりうて此文なしいつされく。
師説 それはさそてと云ふと
河内ハ菜穴紬のひかるすきて
そうぐしうねハ家のもくすくさしめわざ
仍てめてこまる世をとさとめくうとのんて
なかるにもりうさ世ぞとはさざめかね
島衣と云ひる恋しく候の天
盃る故何ぞ細又和語ニ二つ出を
三木枯の女のゝたく
ふうぞうやしとひもしそんふさてまつこねあし

紫やう染くるこあいさらくしらしくぬハ大ちく異なきわざなりあかどをそ女の袖らく染しハ文もくめゆすとさ
ろさるんといへるく
師説 さやうまうつさ女もふさきらきりとあかれしててうくらく女よ
はうまりうさ此せをとさめるなさら
それハせハ表のをさをきそを定めねてあるるそやよめく

事もろく
曉 おめのの初也
まつりるるくしこめ
さらもろつきく

えんよのきしそるす
細 めぐくきくこれゐの
りうのとく人のんれぞし
へよぞり

ろまりかひし雨ハ人もちらまちりぬ
季妻より短姓と勝うるとく
細 寺こむそ
せまとよゆへありとみてめぐくぐらよみ。
まくく
ちつきうさのひ知くつまをとでつきはつきづるか
琴ひくく
さぐくしう染らさつわつり作きみうあも
足吟
こともなく作しうぞこ此さわれ袖をちらとけ
細 指名ひうる女など本甚るとく
たうくさみく時くゝくろへこ作し短ハこまを
指るひをと云
くあろとゆり作きこれ人つぞて短いうぐハせ
く丘るるとく
んおられあくしくをすざめるハうひるくてあぞ
盃粧をとるめるるくわすてひ木枯の女ゆるうて
嬰
くまりするりまして此ぞらますがゆくえん
鉄
ねきめうるこるるする
まこれましきことハめよつるね雨あるこめつら
細 えこしこき

いまめきさうなものこゑ　暁　和琴をれんていまめきさうなものこゑ
うぐひすのさうしを妙にいてうまうし　注
庭の紅葉ふこそ　河秋いまあの紅葉ふ所ゟ
ちるねともいふ由あも此女ゟ人のうふと云ていつ
とう人ゝしみられ我ゟくるゝてかりうとゝ
うふ人ゟもりやうの紅葉ふこそも我てそうの
我手に此ふこそ
今ひとこゑをきゝ人のあ
る所ゟ　盃　そうをとゝ人ゟ
此男のうへうへ花月我に
当るこゑ人ゟまりてきこゑゟ
ゟく我くゝぐ文ゟをきゝ
何ゟ此とのこゑ引うとゝ
本指ゟ吹あゟとゟ師説明義
弥生月うれいとゟえぬゝも
あるへしおの手ハ別ゟ我人あ
るゟとゟとゞ手ハ我つを
るきゝ人ゟ人ゟそりてゟう
くゟ本指ゟ吹あゟを弥うれハ我ゝ
引ゟ人ゟ此ふもゟと此ゟを
ゝられてゟう
みまゟきゟを　うみゝく
ゟうれゟとゟくいせ物語ゟ
此東ゟ女郎ゟとゟそうりうそ

ふゟくなるかなりて　祇　女ゟ人ゟりみまゟきゟうを
書かりー　敬かり　あの琴ハ平調之今十月ゟれハ南掘
いまゟりー　上ハ和琴ゟ生　注
はの色とゟ　ゟに調みゝゟう
ゟとゟ黒のゟゟとゟ
う吹　暁　弟ゟ末のゟ屋ゟしのゟ
へよりゟりー　ゟゟゟこの和ゟ実
ゟ用ゟとゟの差別の仏ゟて
とゟゟゟへ

その和のゟよゟうのてそ
彼敬上人ゟ愛法一行ゟ
ゟゟゟけみて跡ゟ約ゟう
しそゝ

敬上人　河　定家本ゟ筆とハ此ゟ
ゟのねもゟ
ゟの和ゟとゟ我ゟ
ゟ人ゟひゟや
ゟ
今ひとこゑをきゝ人のあゟ所ゟ
盃　そうをとゝ人ゟ此男のうへうへ花月我に
当るこゑ人ゟまりてきこゑゟ
ゟく我くゝぐ文ゟをきゝ
何ゟ此とのこゑ引うとゝ
本指ゟ吹あゟとゟ師説明義
弥生月うれいとゟえぬゝも
あるへしおの手ハ別ゟ我人あ
るゟとゟとゞ手ハ我つを
るきゝ人ゟ人ゟそりてゟう
くゟ本指ゟ吹あゟを弥うれハ我ゝ
引ゟ人ゟ此ふもゟと此ゟを
ゝられてゟう
みまゟきゟを　うみゝく
ゟうれゟとゟくいせ物語ゟ
此東ゟ女郎ゟとゟそうりうそ

ふゟくなるかなりて　祇　女ゟ人ゟりみまゟきゟうを
書かりー　敬かり　あの琴ハ平調之今十月ゟれハ南掘
いまゟりー　上ハ和琴ゟ生　注
はの色とゟ　ゟに調みゝゟう
ゟとゟ黒のゟゟとゟ
う吹　暁　弟ゟ末のゟ屋ゟしのゟ
へよりゟりー　ゟゟゟこの和ゟ実
ゟ用ゟとゟの差別の仏ゟて
とゟゟゟへ

その和のゟよゟうのてそ
彼敬上人ゟ愛法一行ゟ
ゟゟゟけみて跡ゟ約ゟう
しそゝ

忠のまくに　細　以中將之子
ゐんのまうぐべうぐのろぐ
ろろるまをそそ而白くやう
うさうとく
萩の葉ぬぼぐのわくれ
細引ろ不可及只あろこう
んなろくく　紙註　河海ようり
ろをとうり立まあてうり
るまえ只心うろくくやく
ううよりくとすちさ傳乃
人とで傳んよいなぐりさ
むの源く　孟同前
河おてえべちぞそねべき秋
萩の枝とそくにそろ白前
川ろふう前うなく人あさひと
のまや曼べのさ海ぐぐく人
七ち也あまろのかくよ
細ろ以源氏ようも七年斗
のえとる義元只七六大教を
あけて今ちと年もうさ
ろうてちひおえべきゆく。
紙孟同前　花櫪樟七年
とりひてそをのおハ七年ま
ろれべ枝よまろと儒者の秀

なしあやろくこのりげるくぬしく行さ。
今ろり投いなう
さ流んのまくくく水垢くべき萩のまひ
ろはぐそくるんとろ秋ろまざくのうへ乃あ
られなどれそ
のこそ。ぬ
もなくと也あ
るんなめがく
たなめるん女
よいんをもと也まんへあやまち
べさりのなりと
ううとくいまひ中ねきいのうるぐく。
ううさろひ
ううそそ

ろ不ろくよめろうろのま
限あるとハ三年とも七年
ともうく
すさくいめんん　也　教奇挽
ぬをまさうびさやをくあ
ぶくくさ女こさハめろし
ムつくようねそ箕　婿也
ろまうてそんんの
或抄　ろまうてとハ女のあろ
ましさろまいして相之
人の名をもろこ物し
とろり

見そくぬろうあく
細ろのむよりけくハ根ひく
ここうくいてもろくこてくこあ
れ　悪　ろあろく

ろうへうさ　細源氏の巻々所後源氏の初く
ろうへうさよつけくも人ろうもうれろう
きろ流ものぐ
ますくこ　孟凝方　自凝左傳　愚ろ物くろを
うろを。中ねた
せんこ流く細　女もろれゆくまにくろうのむく
ちもうりべうく
ん。そ。いこ
細行ま。くとまてへ心ハさ
まくに表とぬべ
ものよ
ちうのめるうろ
まうてうむんとく
てうめりくを物をとぬや
うぬやうまひさ

しかるのみならず、ちかもと
はらあかさ酒とうらこ入り
熊さらまねらんやかてひし
やうになり

わがことわざのあらそひことを笑
奥入 白氏文集秦中吟云 主人會良媒 置酒滿玉壺 四座且勿飲 聽我歌兩途 富家女易嫁 嫁早輕其夫 貧家女難嫁 嫁晩孝於姑
孟子のことわりは公貝家の女と富家の女との得失を論じ
さとしめす家の女は嫁娶なれど
のちに不足なくねがひによく
とゆけいもぞ夫をうやまひを
おのれがまし家の女は
婿礼などはさとりなれや
うすれども事成ぬれは夫を
うらみ孝あらそいこれは富
士の女貧家なるにまよひて貧
アよびきらせたる

さまの人色ごのみそこをひめぐらしさんにさ
とぴてうりふらくぶらしのさばらまくのえら
せらうしくぴどべてらのあつそべくなん侍
らざらしぴそれはあたらせのりらみぴくりん
などし侍そてぴまうりかひしほどふぴあやじ
のむとめどもと物かうらさかへてならぬき
つらではなひらりて侍しぬ物やさらつけく
さらづきあて出くく我つてりのたくうふとと
けとなんきこえごち侍しらじぬきくくら
とけくもまうしぐぴのみやのひとはうりて
さもぞなうづひ侍しほどよ、いてあわくれ
まりひらとねさあのあつてひかとあり

くみことは物と　其名なそてく
書簡なるへしゆへにしくかな
ほらくはひそくろし
こうなれりと　此る事は詩のうえ
作文とも詩つくるもく玉屑
よ折腰辞とは事はまた詩の拵
へ今もまるにあらまるへし本
あもうしわれてとはそるあり
細こみれてとつつるもし折腰
辞もくはゆかぬるまし
弘文なるふの方へ何かるし給
らくくなくそつるる
以よのらし
るるむし只御しとろすろても
女は才智なくてもくるしかるぬ
ゆへとすつく愚癡なる女とも
なるし只御しとろくえみる
ものにそもめりてちの我かは
つきに孫よびれてなどもさひ
そらなすもあるられはとひ
くまなる女は母は物ぬくとよ
くめてられてはわれいとも
ときうてしもへし

さしつぎ物やけよつかまつるべきなく
さらし紙をしへていとまけるかすもと文
みもむかしより物ときらまするすむく
あくいひまらし侍よたのつくえまうり
とてぞれりのを師としてうなふつるる
うとれ文つてろこるすらしひ侍しは
ほまよそのとんは忘れ侍しねどかうしさ
いしとしらよのまんよ。言ちのひとや由わ
ろたうんかまむひかしきんはなづうしく
きんみし侍し。まいてく弄ちの作あわよは
うしをそろぐくおくてるるほとしら
こはやみつらときさせあつむぞるかしくらあし

師のくしとうんきさいまき
男かしとす細きくてたやす
うるわるわとかいおして
女子ハいつくしく物そくし乃
らく子細ハ物のこまかなる
るく子細なることハ大やう
なる凡し
総 男子よき物ハ竹しものゝ
細 女ハ或ハえんなし或ハ口おし
るとゑへし宿世よまなせてわ
れハ男ハ子細なるきねゑなくせ
のひくき物かれハことを切て
そのこしをとふしるかうし
てみるえ大なる男子ハやもそれ
物乞と云之 孟 男ハ男乃利よき
と 箋云 此服行思惟を入き
らわう 師む思惟と己とき
これきし人 此女まきをあ
ろしなまさりし人くいさく義を
人の行状よとりてやそ各よ
はくるす史記の筆法く

ところでも[illegible]紙くずつくりを乃
ひくき物かれバおのこしまるんしさい
なる物ハ物めうしまばのうりといひを
むしてそむくわしりけり女かれとぞう
ひすどうてろうえなくもなのまうり
物ごめうそてうりわすまてひくしく
まうしぶりしにりのまうりよてちよ
ア其て物かれバつねのうちとけおうりさよ
ハ物しそてらやましきわらしめくわんあひ
て物うしふきぶつめやしせくうまりしくも
みしさふうたりとまでひのかうはこれもうし
べへきぶうろくちきわちんじをべきさゆも

うくねちのまうやく
細 土用のひうなしひて業
よ用ゐるかれおうくし 秋 并業
いひうく久の暑氣なしてう
用る物あや 熱 をうやくを
そうしせへしときやうし
まうへしんこしら
似合しき職くの用事な
とハ物うしふかくもこてう
けうくんよく
いうれ物うんん
異本よ云し
こうくちくやねわくりん
事よしそのつくやと
やむひりんとも
ようやくよよ
式アもや立ちてゆくねず
声きうハひてうくきえ
とうちく

わうぞ世のぎうつまは世ひとりてうう
ざりうて急もちやりうまくりよ今月
びかひやうみりきよさんへのそくぐくねち
のきうやう俄かつくしてげとくるおようり
すんえこひめん給ちくぬ。まのわうりますに
もまさうんぐくんぎうしらハらけ給ちくんと。
いつわうれよむぞくちくいひ物りうつくへ
よたうめしもはいうれ物らんぶきうけある
まちねとそうちうぞ物よ。さうじくちくや
我ぼくりんらの事うとるんばよ。さちうり
まえとぶやるいよは代ぶてむくさんもい
くゐしおぼし立やもそうめべきまるくね

九日のえん 盃うてぬかくしむべし。花 重陽の宴は天皇南殿に出御ありて内弁外弁等あり文人博士を召て題を奉らしめ各韻の字を探て詩を作て文台の上に置く講師読く三献ありて氷魚と云者を御前に給ひて宜陽殿の左右に茱萸の袋を結付く御前に菊の花を瓶に作て近代八宴の義絶たり

[illegible]

中納言の君中務のうへ
盃奉上の友女こ花中納言
の君八源氏の次ハへうろひの
ゆり一枝をとりあひ人
〻中務ハうへこハ未摘花をに
源ようひうて大弐のほれ乱
いうそやとこうしく人
うちとけてこれハ末丁へうそく
細景さにこれをハ海気
八帖〻本丁とうそくまいます
師説右大臣殿の五節の夜
あうさみくみうへ八帖〻
やうろをハ源氏ハあひう
も景色ハうろうろ通
あうう海とて　盃あうよう
しとく人〻の勢あをかいの
そうまあうよう細うへや
うへ八帳を隔ての對面とうへ
いうやもうくうろう　筝の琴に直
よ對面もうく腸息をふよ
ほうて景色みとみうへうさ海
あまうろやをさほうろう
こうへいろ称うろうへうそう

細中央の称うて中称ともえ又ハ称ともろく毎夜うり天一神のうへ
よあうとく　祇うううううとうとハ庚大尽の庚午のとなり二条院をハ二条東洞院うへ
又ハ内裏うり辰巳の方よ此頃ハ二条院をハ二条東洞院うへ
師説金擲経二六天一五中央ニ為十二将定吉凶去し天一神ハ地星の亜也中央よ之のゆへよ中
称と号也四方よ五日づ西隅よ六月づ巡行をそ日よ童わてもくあうゆへ也称も
うへく此称のあう方をみさごりとみへうへの中よ方違あうるうり。癸巳うり天上十六日あう
ろを天一天上とうして八方へゆうてもさうりうへ

師説昨夜ハうへ又ハ眠くうへうへてのなうや
ひとなやうへ
方違うへ
あうへいうへ
紀伊守源氏の家人伊予
ゆうみあうへ
の中称のうへ
いれくをびしうへ
うへ
うへ
うへ
うへ
うへ
うへ
うへ

細花名栄花物語をハ此叶
うへ中称ともえハ加久我八東院川
八西京桂川八中央ゆへ中
称うり花栄花物語ハ四
云中称ともへうへのうへみのぶ
の羽にとハいろ人のをうろ
池やうろ山うへありて称
しうへうへうへ栗田殿
のれうへうへ

ほどへてもとりうしなふことなくてひ
とつとこそ侍べれ。今更氏物
語の中にの家の紀伊守ぞ家
みくやりのせんさいのごとくあり
てかくことたゞ事ならねばなり栄
花物語とお遠きさまやう

(他のさひ人のうへおりもうす妻之上のおやうしんなどくし)
(細今我伝をかくごとし作せてるゆくし)
(孟退てくし)
(よ紀伊守の父し)
(空隙をうそ)
(下紀伊守の後家をよりつとを須磨にやるまでくし)
(細作者の後家ももし名)
(晴のごとく)
(泉水之)
(納涼をうのごとく)
(温くし)
(亭主し)
(相模の名し)

風そよ〳〵うて
細雨もよ〳〵降つゞく
憲陽六月とあり。共月ハあ
つさあけとしるべくなり。共月ハあ
まりあつくもなく
そこそこうちしるき雲ゆきあく
笑そこそこうちしるきうちしる頃
ふゆよ虫のうくにあく人なれ
の事に入てうく人物もされ
ぬ共の時くそこそこうとをきを
とうち祖を面白
あゝしもさうみりとびと
何もまぶれのこゝめをうに
もよくてあゝいもとやう
うもうさよさうみすもやよ
こゆうさの後よりめうりあ
げよ風俗　細そのあゝハ

紀守かうにこのしもゑ如く
このみの品よとりあへく
細 前の品之よ中の品とそ人の上
へきやうやうと云て人の上
ようつけてかくるし
と式家のあり方を源の君
らへして云て 細 合をみく
の内へまゐるせんかたど人ゝ
さひおれる 細 空蝉といふ女
まめのそうるひ 細 夜ハみる
そくしとさうくかりてよ高
あるまじき紀ゆ之顔ソ
おり氏女もひめりきねとそ
やれそねいうさびき之高ある
へし又いろ稀もつさびきす
れハ高きてハ不可叶
かうしをあけけら
細 女の方のかうしなり
其ハ如此紀守御気也
とて少かさすなり
さうじのかみより
細 障子の紙よりてひま
にやかへし

このいそぎありくほど君ハのどやかに
ながめ給ひてかの中の品にとりいでていひ
し。このなみならんかしとおぼしいづ。思ひ
あがれる気色にきゝおき給へる女なれバ
ゆかしくてみゝとゞめ給へるにこの西
おもてにぞ人のけはひする。きぬのおとなひ
はらはらとしてわかきこゑどもにくからずさ
すがにしのびてわらひなどするけはひ
ことさらびたり。かうしをあげたりけれど
かみ心なしとむつかりておろしつれバ火と
もしたるすきかげさうじのかみよりもり
たるにやをらより給ひてみゆやとおぼせ

ど。ひまなけれバしばしきゝ給ふにこのちか
きもやにつどひゐたるなるべしうちさゝ
めきいふことどもをきゝ給へバわが御
うへなるべし。いといたうまめだちてまだきにやん
ごとなきよすがさだまり給へるこそさう
ざうしかめれ。されどさるべきくまにハよくこそか
くれありき給ふなれなどいふにもおぼす
ことのみ心にかゝり給へれバまづむねつぶれ
てかやうのついでにも人のいひもらさんを
きゝつけたらん時などおぼえ給ふ。ことなる
ことなけれバきゝさし給ひつ。式部卿の宮の姫
君にあさがほたてまつり給ひしうたなど。

すさまり
さまり給とて
されさうくき 細 さハわ也
こと此る事のかりさハ書に
あうとく
只うのはおそおも 称蓋密
通のうすと人のうりもと
きくてけうてくく
式アの宮乃姫君 細 桃園
の式部卿宮の御女 槿の斎院
也是よりきこえたる
し細く云出し給り前
よありつる事をいへし
此歌此物語の稀く

いろうと　細姉をも妹と云
系圖をも人も妹を孔を女
みそん皆まつる影く
まみくより等空隙
系番よりあるを孔も女を
男のもまよ云法く古今の序
まするのものと天照大神
のみくそう天照大神も
あるまくまも女神る
おくより
ひるめむち　細小君の御しる
若き女房たちの御ふさ
ねくくみくくも
細ちく我うをんくくも
同をけりと源の女君
女君はうくこの　細源氏の空隙
の声をきて御障子隔て
八寝殿の母屋の南面と西面
との中と御うち障子へだて
ういうちく八今秋源氏の寝
所し寝殿のあれひくうお
の御まもるんのひくそ

ちくらんと
きりとてみね
細小君と空をおうく
いとうくてうと
細空隙のまと
ひうれいりうとくうと
小君ねうくうと
ひうみそ
とお君れ
そうつうけ
げよそめ
細空隙御
ふひうみ
つまくまし
つまうをねうんくめくもとひさ
けうとあぐ
細小君の御
ねねくむあ
べし女君
空隙
女君はうこのさくぐちそちひ

ふとあり空隙のさはおそ
てこおよせおのさしの
よ人のりくもうとあり
されはいぬのおつまひ
しりてのくうは空隙
の所所八西よもちひさ
ろく
中お君八つみそ
の君の女房ち多く空隙の君
てよく
なけしのまに
女房達のみるまし下居は
雑舎あり

うこのけち拍と
家ちうちうちう
ろく

さくやう　河　細
みた

中将
地ちくうくの中あの
下るま中ねは湯あこしてみくく
ふりふゆれちうくぐ
原
れ
原
空隙
障
原
細小君の御
原
空隙のさくぐちそちひ
唐櫃
原
源氏もこそうよくうくぬ
ちいさ
原
源氏もこそうよくうくぬ

それより人のあはれをしらん人は
義 此詞金言也とてふかくあはれ
らふかしまゐらのかたり此家
女も皆しるべし哀れにふかくば
実ぞの事ぞ無八人衆しくぞ
かりてあはとくし
さうひきされど
中ね源氏のやくとのかふ
まことをさとひきさるく
どうもなくて
盂 源の動轉なくてし
あくるうゆかしよ
義そしめはひきしに源の
霧あふ色は母屋なるぞ

みもくゆりくらからもうらよむひよりぬおお
細源氏をさしてきく
さ御しうとはいへるうしぞしともひまどへ
中ねうくく
あれど我もしむりくれしすなくの人なれば
すべての人をさして
こそあからかにもひきされどもめぐれぞ
よ人のあかしらんいつでおんしてもさ
はぶそそろひきされどもぶらもなく
細
みくおうゆかしよ入すぬざうじをひきさ
盂 御座
てあうさよれむつへよりのをとうとの絃
源の月し空蝉と中ねむすまれとのまて
へば女はらの人のちうんしまくへちぬげうり
空蝉ん
まりるをおなかくてまぐあきあれちて
ひとるやおしげるいと地もれどきいの
細
いづくよりとそでおふ云の筆よぶあらん

いうわさくらぬおも人きさらん
さりとは源のちやれわざわ出
よろきさくはあさくいあらし
ともいふみしききしのうね詞の
若への我ともひとりしをそう
よおもへさいぞ浅く思ふ
きそくく
やくやうたらさいて
細 花ある上臈下臈のさいを
やみくさくて禾おれ女のすね
が定よろ男へみぶらかうつさ
こいかなれらふ家之狭哭
めしあの神よいうくれさくれ
せぬ御ひのよりして
そのうちぶらくをと 義 源の清ぬ
弁のふくせのあるうさぬといま
どうかさんへむくとく
あわうらかうちまそそさ
細 源の物しきやつの方枝とれ
ふいつてりおうかぬとく

あわれそしうぐらなさけくそくの絃て
細空蝉のこと
そへあれどもそくとあさましくさまざると
もゆかりとてこそなでるしぬ男もぶしくと
盂 下く師撥の字也
おやしくそうは人ぞ人の縁もいつて
あさくいそふすへざらんいでとひやくなりさ
はくさそくとしてそ作らなれとそぐくと 押
立 世理
うらぬへるとぞあくるかけすくうしとを
ひつうちさ雨もげぶいてゆゆくくぶさ
源氏
しきけらひるすれはそのさはぐくとそざひ
盂 物事也
そくぬうねぞぞや、やくぞたいくやくて
よゆりひるなしまへるなんてそあわうらと
のづくさくゆやくもあつさんおみぐちる

なもとさごゐ（細）くろひさうくさおや（淡の字阻の字あるべきよ）
世のはかなうくやげよう（ほの空）
ほどよみ行とつゝてのち（細）
くうちなうちうちうちまぐ（ほの空）
やもうさすぐ（ほの空）
げよのてまぐ（細）
雨のつよ（ほの空）
きれぐもくようみうちづきみしし（ほの空）
てそぐてんとやひて（細下のうさ義柔者勝強しろ）
みしうくんぐしのくやうちうふつよ（地）
（師れんさうのかり）
きんをちくくくれぐみ（ほの空）
おう行うちてくてそぐよりぐくもあくよ（ほの空）

ふうくくいあれし（細）
係氏も中係のあうう絶と
てうくくいあれし世たと
義うくう係しう初ようみ
てうくくし係のくく
ぬうさ笑の周郷るれくく
一色よ世のほをもうぬねの
やふよく
孟帥行しうんてうき
孟帥行れのくく（師世の係
をもうううぬやう
よもうううく
いとくくうう刻のの
係のみのまよううぬむうの
ふみくくいくく
細ふうをねみるや世の中
とそうみうの紙ふと思え
や帳の一生涯試験のごう
みうれふまくあいねもも
あうさねとと

うろやまうう（孟帥行し）
へをうみうう（係の初）
なうちうちうう（ほん）
むげかせ（ほん）
んいうう（孟帥行）
さふのほぐれさまぬありうぐ（係氏と紙公）
のふみくうれんぐとまよぐ
うんいうれさのふ

のちせをも　細河 若狭なる後瀬の山の後もあはんわが思ふ人にけふならずとも　花 後の[illegible]
[illegible]
[illegible]
いとかうかりなる　細 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

も思ひ給へなぐさめましを、いとかうかりなる
うきねの程を思給ふるに、たぐひなく思ふ給へ
まどはるゝなり。よし今はみきとなかけそとて
思へるさま、げにいとことわりなり。おろかな
らず契りなぐさめ給ふ事おほかるべし。鳥も
なきぬ。人々おきいでゝ、いといぎたなかりける
夜かな。御車ひきいでよなどいふなり。
守もいできて、女などの御かたゝがへこそ
夜ぶかくいそがせ給ふべきかは。君はまたかや
うのついであらん事もいとかたく、さし

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
細 [illegible]
[illegible]
細 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
細 [illegible]
河 [illegible]
[illegible]
孟 周章

はへてはいかでか御文なともかよはん事の
いとわりなきを思すに、いとむねいたし。
おくの中将も出て、いとくるしがれば、ゆるし
給ひても又ひきとゞめ給ひつゝ、いかでか聞ゆ
べき。世にしらぬ御心のつらさもあはれも
あさからぬ世の思ひ出は、さま〴〵めづらか
なるべきためしかなとて、うちなき給ふけ
しきいとなまめきたり。鳥もしば〳〵なくに
心あはたゞしくて

つれなさを歎くしもあらでぬ篠目よりあ
へぬまでいでかうもさへん。女のおもかげさ
かずかふやうにつれなくまだ見ゆるさらりて光
できさかめでたしもなふかもなぎかなき。
つねいつしもくもくふづされしと云
ひあなづり伊勢のこさるを思ひやられて。
哀なりとゆんとそしおそろしくて
まし
身のうき歎きけくよあそであくる夜はと
思うきねてぞねとすされまうこともあく
なれべきうどくぐちやすくどうろ給ぶいも
ともへはぐしされバひきさそてまされ給
ほどなくべつうの関とみくさう。ゆるすを
しるでる給くられどのうきんよさでし
うちあから給ひしまかれてのうきしそて身
あけうくべつのぞくべうめうぞものこれ中
れ給よりそしうこさうしじれをよう。ほ
のうふそし給へ分れむき海と見みしむ斗
かへろそれぞもあめう。月ハあう明り
て光りきされろうめうし。給さやうかきて。
おくかしきあけばのうすうなるなぶおきさ
乃気色も。うづくろ人へしそえんみもそぐきも
みゆうたりきうく人きれぬ地きろうまいりと。
むねいつくごとつくやうんまでぐうるなきさを

一読せし古本に

いかうよの　細 空蝉の事也あるは
なれども味くらるまさに見ら
うらうしてそこうし
小君もとへんまで此源氏の家の
ろて空蝉まで空蝉へるまでそ
しかのんぬきうる数多いの
かるゝうまうれいらちて不
審りいえへともとし
わくしもたらしもて
師 えひもめらうとそく
なりみまうみゆさうるを
云不もあり
さすうま師文と
師 らじも此地へどけらと長
ゆしえれいかうゆらうて
まとい源のこゝろれいすぎ
らてまへとひろぎうう
なりみ小君まれうんく

孟 小君とられてまつりく　小君の祈之　細 妙人古悪人
てんみおくまいれりどもやうるかうしとに
ゑまれじなまめきころも海あまおそくへ
細 小君と源のなかの事也
しゝしらめしいれくいてうろしくう
うしひ給ひこふぐらうよいてめぐさふれと
源 空蝉の事也
とのいりうしのこしもくうしくとひ出給
小君の祈之
まへるとしいらくへ出しねずしきをぐびりし
源光蝉のことひかやうき
げみえびまりられ、いらいでみくえれ
みえそゆへさやうるひうるせ　小君の心
どいうくいひきせ給うしゑそてを
ほのめかすもさひのかすれどゆまれどうう
小君思思もるもるく
まあくしもさてしだげめもとおもてうまれ
空蝉　小君
ば女あさましきにおぼえてこゝぬこれよの
おうんそまゆりしれくてさるぞずよれふても

こえし夜と　師 えし夜と
八宿すあんこうるうしやや
ろうみかりしいきれんな
へしひとむ事し夜を又
えうるのりやし弦くもに酒る
目もあやしがねもやうねゆく
紀まき為ふもあかぞにせと見
めう秋　細 意しさ也何まつけ
てう尉ん為ふもみくぞゆう
秋みけ思いは
んえぬもくせ　細 文外の家
よ文字事又源氏のかうう
よ字かへもうまくもせて

かぶまし　細 空蝉の君之小君
よ訪りんでいはうるまなよ
と也りかく
いで　発語の須し
ゆよるげうるうすいは
さるしの中もありさるうす
ハいてぬるそとく

孟 西源之　細 こころざし多く
紀伊守くしよひろげきらいて物ゆくそ
源
らし夜をあかしりやよあげもまよ光さ
えとまり給はで
へあそてこうもへるまろ物ろ夜をとれだく
源の風情と思ふ　孟 源まれて空かさ
あざめもをすぬれりき海もめもとりて
うるとて
ゆえぬくせうるそくりけり身とおもひ
源
でけうのまをさの日小君めしいれ
細 空蝉の須也
ばようりそけうりとなりれかさとろく
細 小君也
きんのみしとさてしうしのまへばらあと
小君詞
てどづからくもの給つぶらしやといてはさい
空蝉心
しきんしのよらめましくのくりなくの
給ひえうせつくせうしゆみまりさうとう
細 空蝉の須也
ぎりあしふぞゆすけるこはいうきを

めもてこはいかゞ
源氏のめすまはいそぐなま
いかましきそれとく

あこはちかしき　細　源の詞也あこ
とは小君をさしてのたまへり
河云吾子日本紀　我子　五音
横通
そびやぎ　哢　うびやかなといふ
也紙ひろげてたる也我をひろ
ま油げあしとてゆるりてがず
しきほまられて我とかるつ
まめかしい小君事のくらふハ

そしきこゆげなきをいまり給ひそひめとをれて
細小君の詞　めてはいかゞかくてまりぬさのこす
きんよりのまへげくのありさまとおぼすら
ゐあらひのうへ　しき物にもひく津いせしよりかれ
小君を紀伊守つれてわりなく　ごのこゝとりもうしづきおそありける
源のふ君をめすし　めしよせて晩日物くしたる紙うれおひも
源氏の子まう　すゞうさみやしく　あさきかありとおもんふいがらち
あかくぬるうゐいづくしの紙よなりくと
ゆうとおし　源詞　ゆよりかひそのこしやあさましてまうさ
と文まうし　もまくりおこはふじおそのほうの歩れ
みそうめてゐるのおみちく　よりはさまよう人ぞされどものりしお
すこびほそしきそゆきゐるうしるを

せんとこく　かすかく

うけらげ扇　細　装束
調さる出く河内蔵寮外ニ
御服うし裁縫ぬとへ　後涼殿
まうみうしあるのことは源氏の
御かさらあふく

むつくしきあさくうきん
源氏よ不意よあひさうか
頭のしきりさ名あとき
へあさんとく

おうらてかくあみづり給ふありさうをも
あこハ我子めてとあれよらのきれりしくハ
細すれうらりきんとのまへいざうりやあり
きんびうじうせきうてれとそへうとおう
しきゆびきこのおとゆいしまそら
ゆもおくまうそしのかよつれうげ扇
よのすてさうくかくもせき給すてく
とあれさのひしきさうけてうろう
よかやめうそあゆのひあゆうそへうたに
細空蝉の頁ゑ　されどこのこもいとゆされしふら傍る
ちりさはかつくしき君さへとりそく
ん身の様ひとむて　ゆりつさなうかくらうえ
めくらさきしもわが身もしくしてそとみひ

そもそもこと
細女のこころうきうんの時勝
うくもあらんを一度侍女
のまよるうくいめ伺かる
るうしんをいめをもあ
きくく暁花同

うくうく　細不用心君
うるをと不用心暁　遠例
気なる中不穏の中
盃ありのうくとと
ありり
男もいとくつく
平塚ようくうくとの
まつて
うくまのいをうくく
集
くそれをそめよ
しそひてるれいとしま
とひのうくりそれと
くうをやもうくてる
くうくうるうくと盃帯
本八平塚ようくうかを
いそれしあつぬ中不
帯よ泊まて

細
佐谷八
さんく平下のくでんを
るくもうを宝うるる
みもあうぞとく花る
也てうてみ玉いうるを
消うとハうくび而花る
よ名独ぐところ独える
らハ回宇に帯まをいまま
じうく結着みてすまこ
小更わぶくもあてな
こしび作候をもうるくし

ぬ
佐谷八
さんく平下のくでんを
るくもうを宝うるる
みもあうぞとく花る
也てうてみ玉いうるを
消うとハうくび而花る
よ名独ぐところ独える
らハ回宇に帯まをいまま
じうく結着みてすまこ
小更わぶくもあてな
こしび作候をもうるくし

うくよつけくそんもとれ
佛　うつけのすくしさ
うぐいうのすくぬ不候
うくうくるんうう
よれるさゆ原のんもと
まるぐく

すくをぬまれ
てやみるんと
ばうるうくそ
ろめくく結み
とさうあれば
るるんの侍ぐ
うりぬれとい
ろりくくみる
ぐうりのと
うくぬまうをきでそれ
ま
あやなくなぐひめるれ
うくぬまうをきでそれ
ま